

善光寺三門の額に牛の顔 七年に一度の丑年と未年の御開帳

長野市、善光寺は七年に一度、丑年と未年に御開帳が行われる。四月五日の開闢大法要から五月三十一日の結願大法要までの五十六日間が御開帳の期間である。

御開帳というのは、普段は宝庫に安置されている重要文化財の前立本尊を特別に公開することである。善光寺の本尊は一光三尊阿彌陀如来立像であるが、この仏様は白雉五年(六五四)に秘仏となり、その姿を拝むことができなかったため、かわりに作られたのがこの前立本尊である。

一つの舟形光背の中に阿彌陀如来、観音菩薩、勢至菩薩が並ぶいわゆる善光寺仏の定型となっている。御開帳時には、阿彌陀如来の右手に結ばれた金の糸が五色の善の綱につながり、本堂前の大回向柱と結ばれる。参拝者がこの大回向柱に触れると、直接前立本尊に触れるのと同じ功德があるとされている。

御開帳は、長野市の善光寺、飯田市の元善光寺、甲府市の甲斐善光寺など、各地の善光寺、同時御開帳の年もあり、御利益も大きいといわれる。

善光寺といえば牛とも非常に縁が深い。仏が化身した牛のあとを追って老婆が善光寺参りをして信心深い人間になった「牛にひかれて善光寺参り」の説話はよく知られる。

もう一つなかなか気がつかないが、「三門の額「善光寺」には牛の顔が隠されているという。

輪王寺宮公澄法親王享和元年(一八〇一)の筆になる。

この額文字は鳩文字といい、善に二羽、光に二羽、寺に一羽の計五羽の鳩がいるという。

また善の字は正面から見た牛の顔を表している。畳三枚ほどの大きさがあるという額だが、三門があまりにも大きすぎて、下から見上げてても肉眼ではよくわからない。オペラグラスをお忘れなく。

